

# 鎌倉大仏様の復興

大正大学教授 玉山成元

目に青葉 山ほととぎす 初鯉

新緑の鎌倉は美しい。観光客も多い。

中でも外人の観光客が訪れる目的地は決して露座の大仏様。国際的にもその名は高い。近世初期に来日した英人キャプテン、ジョン・セーリは、大仏のことを、ガウンを着けた姿と表現し、平戸の商館長をしていたリチャード・コックは、巨大な真鍮の偶像に感嘆し、世界七不思議の一つとされるローズの像よりも大きい驚くべきものと日記に記している。単に大ききだけでなく、そこには東洋的なほほえみと静けさがくみとられたのである。

鎌倉やみほとけなれど御姿の

美男におわす夏木立かな

と詠んだ与謝野晶子の歌は、それを如実に物語っている。

大仏様は、北条政子の侍女稲田野局が、源頼朝の意志をついで発願し、浄光上人

が一般の民衆から浄財を募り、暦仁元年

(一二三八)に木造のみ仏を完成、翌年には大仏殿も完成した。ところが宝治元年(一二四七)に台風で大損害をこうむり、建長四年(一二五二)現在の大仏様が作られたという。わが国の銅山が衰微していた当時に、一二〇余トンの銅材料を集めることは大変であったろう。浄光上人は西方極楽の教主である阿弥陀様を東土利益の本尊にしようという熱烈な信仰のもとに、一人につき一文宛の勧進を計画し、東国はもちろん、北陸や西国まで、広くその推進に努力を重ねた。鎌倉に芽生えた新しい思想が庶民に浸透し、救いの花を開かせたと考えてよい。

鎌倉の大仏様は腕のよい鑄物師集団により順調に鑄成された。丹治久友や大野五郎右衛門はその一員であるが、下から順次階を重ねた巧妙な鑄からくりが施されている。頭部は前面が七段、背面が五段に鑄継がれ、軀部は大体七ないし八段、ことに下腹部から胸部にかけては上下五尺幅に及ぶ大胆な鑄成で、その優れた技

法は驚くばかりである。含有元素からの

研究では、銅鏡や銅銭も使われたという説もあり、奈良の大仏様と比較すると、銅の純度は低いという。国家的事業として作られた奈良の大仏様と浄光上人の勧進によって貧者の一灯がともされた鎌倉の大仏様とは出発点から気持ち異なる。心の底から極楽往生を願う庶民の気持ちだが、鑄物師にのりうつり、現想像への完成となっていたのであろう。

『太平記』によると建武二年(一一三三)五)大仏殿は大風のために倒れたとあり、応安二年(一一三六)にも大風で堂宇が崩壊している。『八幡宮長帳』によると、明応七年(一一四九)に大地震と津波があり、大仏殿まで海水が上がったと記されている。再三災難にあった大仏殿はこの後建造不能となり、露座のまま今日まで約五百年も過ぎている。そして別当職(経営)も建長寺・光明寺・善光寺と変り、さびれた首都鎌倉を象徴するようになり、近世へと突入していった。

元禄十六年(一一七〇)の冬東国の大

# 鎌倉大仏様の復興

大正大学教授 玉山成元

地震があり、大仏様の台座は崩れさがり、危険な状態になった。心配した祐天上人は、将軍家宣の子供・家千代と大五郎が早世したときの香奠の一部で大仏様の台座を修理し、さらに大仏様の亀裂を銅版でおおい、鳥などが腹の中に入ることを防いだ。しかし本堂や庫裏の建立まではできずに残念がっていたとき、江戸浅草の野島泰祐が、その妻浄泉院尼の勧めにより祐天上人に寺坊建立の費用寄進を申し出た。正徳二年（一七一二）八月、泰祐は鎌倉長谷村・坂ノ下村の百姓久蔵以下二十人より、天領の田畠永別高四貫六百五十九文分と、反銭三百四十分の土地を買って祐天上人に寄進した。こうして堂舎も完成した。祐天上人は泰祐の善行をほめたたえ、その法名である高德院を寺号とし、浄土系の管理下に入れて、光明寺の末寺とした。

長い山道を大仏前に進み、三段の石段をのぼると中央に香炉がある。香炉と賽銭箱の間に立って合掌すれば、自然と大仏様の目に一致する。この位置から拝む

のが一番ありがたい。大仏様は遠近法が採用され、上体の割合が下部より大きく、胴体も幅広で、座高は普通人より四分の一ほど短い。頭部も大きいのでいかにも円満な姿になっている。だから大仏様を拝むと、永遠に救っていただけの自信に満たされる。遠くから拝んだり、角度をかえてカメラのレンズを通して、その迫力は伝わってこない。長い山道を大仏様の前まで進むとその距離と時間が、敬虔な雰囲気をもたらし出すのに大きな効果をあげている。空気の澄んだ早朝に、あるいは人人の散り去った黄昏時に詣でるのもありがたい。ある人は雪の大仏様がすばらしいというし、また月の冴える冬の夜は最高ともいう。人人の顔が異なるように、それぞれがいだく美の内容はまちまちである。しかし美を求めようと願う人人の気持ち、極楽往生を願う人人の心は、いつの世の中でも変わりはない。七百年來、そうした人人の心を見つづけてきた大仏様は、今後も多くの人々に夢と希望をいだかせながら、永久に生きて

ゆくことであろう。その土台となる復興をなしたけた祐天上人の功德は、絶大なものがあるといつてよい。